

探求・川にちなんだ万葉集の歌

第51回

万葉の川心

横浜市立羽沢小学校教諭 澤井 園子

大伴宿禰家持の娘子に贈れる歌

(巻第四 七一五番歌)

千鳥鳴く佐保の河門の清き瀬を

馬うち渡し何時か通はむ

「暇なら初詣に行こうか。」男友達が言う。『なんであなたと』と思いがながら、別にいいかとも思う。北鎌倉の駅を電車が走り出したとき、唐突な誘いに少し戸惑いながら約束の場所に向かう、あの日の自分を思い出した。

男が女を想う時、それは必ずしも報われるとは限らない。「片思い」のせつなさは、古時計に刻まれた記憶のように、心のすみに密かに隠れている。どうしてあんなに好きだったのだろうか。その人が触れた物を大切に取っておいたり、遠くに写っているだけの写真を持ち歩いたり。夢に見たり、占いをしたり。一日中その人のことを考える日々。美しい旋律に出会う時、それまで静かだった心の泉に微かな波紋が広がり、思い出すあの日の恋。万葉の頃から、「片思」「片思ひ」「片恋ひ」「片恋つま」といった言葉がすでに遣われ、歌に詠まれていた。自分は丈夫(すぐれた男)と思っていたのにやつれにやつれ、心ほつれて情けないのだが想いが止められない。そんな片思いの歌がこの歌の前後に七首載せられている。

「千鳥鳴く、佐保川の渡し清らかな瀬を、馬を渡して私はいつ通うことだろう。早く通いたい。」奈良の東大寺転害門から法華寺にいたる一条南大路は佐保路または佐保大路ともいわれた。ことに佐保川右岸から佐保山にか



けての一带は「佐保の内」ともいわれ、貴族の住宅地であり、大伴氏の邸宅もこの地にあつた。家持は、父である大伴旅人を亡くしてから、叔母である大伴坂上郎女に育てられた。坂上郎女は才色兼備で、万葉集に載せられた歌も八十四首あり、家持に大きな影響を与えたとされている。家持は多くの女性と歌を贈り合い、恋愛遍歴の終わりに叔母さんの子である大嬢(おいらつめ)にすることができた。花を愛し、花を通して妻を想う人だった。あの日の片思いは、紛れもなく今の自分の一部であり、悲しい結末さえも時と共にせつなく淡い色合いになっていく。

写真の碑は、奈良市法蓮町にある佐保小学校の南側を流れる佐保川沿いの、料亭(旧田口邸)の門に建てられている。

「実は俺、好きな娘ができたんだ。」やっぱりそうか。その相手を自分だと思うほどめでたくない・・・というより、現実にはメロドラマのようにはいかないのだ。でも、いくかもしれないという期待は、誰でもきつと持っている。可能性はゼロではない。(たとえ、0.1%でも)。「だから伝えてみたら、その気持ち。」「うまくいくかなあ。」「知らん。」知らぬが仏だったりもする。そうして人は片思いを繰り返している。万葉の昔から。